九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

両義的なイメージの構造に関する研究 : 「髪」を題材としたネガティブイメージとポジティブイメージの関係に関する実験的考察

鶴巻, 史子

https://hdl.handle.net/2324/1543989

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（4）

両義的なイメージの構造に関する研究

A Study on the Cognitive Structure of the Ambiguous Senses

「髪」を題材としたネガティブイメージと
ポジティブイメージの関係に関する実験的考察
- based on an aesthetic sensibility that encompasses both positive and negative images by experimental techniques using hair -

鶴巻　史子
TSURUMAKI Fumiko
2015 年 9 月

論文要約

本研究は、ポジティブなイメージとネガティブなイメージの、両方を包含する両義性を持つ感性である「両義的感性イメージ」を、現代日本における美意識の特性のひとつであると仮定する。その構造を、「人間の毛髪」（以下、髪と記す）を事例研究の題材として、実験的な手法によって明らかにするものである。

日本発の「かわいい」という美意識が世界を席巻している今日、多岐の分野に渡り「かわいい」を表すものが一般生活に普及されている。かわいいデザインの普及に伴い、「グロカワ」「キモカワ」「ブサカワ」「ダサカワ」「ヤミカワ」などの言葉と共に「かわいい」について、新しい感覚を持つ美意識が生まれている。それらは、「かわいい」とは反するマイナスのネガティブな要素も持ち合わせており、マイナスのイメージをプラスに転換し、ポジティブに捉え直す働きから生じる。有用性や美しさなどのポジティブな表現を与えることによって実現してきたデザインにおいて、ネガティブな要素を持ち合わせている美意識や表現もまた、新たな課題である。

事例研究 1 では、本論の目的である「両義的感性イメージ」の特性についての考察を行うため、その題材についての理解を得るために「探検用にもちいた累積 KJ 法」による発想を行い、髪のイメージについての特性とその構成についての把握を行った。

人は、髪という身体の一部を通して自己や他者の意識を確認・伝達・表現しており、髪は、身体機能的な役割しか果たさぬ存在ではなく、人の内面や意識、感情と繋がりの深い身体組織であることがわかった。以下が、髪についてのイメージから明らかになった構造要素である。

(1) 概念以前の不明瞭な感情や意識、メッセージを表出

(2) 個と社会性の境界が曖昧なもの

(3) 時間や他者との関係性における距離感を示す

また、発想されたイメージをグループ別に分類し、髪のイメージについての枠組みを抽出した。そこから、3 階層の構造を捉えることができた。次の枠組みによる 3 階層構造である。

第 1 階層：「個人意識」「個人無意識」「社会意識」

第 2 階層：「対人関係」「霊性」「社会性」

第 3 階層：「心理」「生理」「性」

感情や意識のような捉えにくいカテゴリーの構成を視覚化によって説明することは、その内容や意味を理解する上で有効であることを示すことができた。

事例研究 2 では、不快から快、嫌悪から愛好へと、錯綜する感性的イメージが変化する際の肯定的要因・否定的要因と、その移行段階を、人間の毛髪を例に実験的な手法によって明らかにした。

愛好および嫌悪に関する印象調査の結果を、統計的に把握することによって、変化要因を捉えることができた。否定的から肯定的な印象へと変化した要因として特定されたのは次の通りである。

(1) 真っ直ぐで整っている

(2) 見慣れない色

(3) 見慣れた形

(4) 人工物に見える

髪に見えるか否か、髪のような何かを想起させるか否か、すなわち、現実感 / 非現実感をもたらすか否か、現実感 / 非現実感を想起させるか否か、ということが感性的イメージの変化を左右する重要な要因となっていることがわかった。

事例研究 3 では、髪を表現要素に用いた作品を対象とし、事例研究 2 で明らかにした感性イメージが変化する際の、肯定的要因「非現実感」と否定的要因「現実感」について検証を行った。

「現実感」「非現実感」の変化要因項目数とその印象が不整合だった例において特徴的な 3 つのパターンを見出した。3 つのパターンから、変化要因は、「現実感」「非現実感」だけでなく、「身体性」とも深い関わりがあることがわかった。その結果、ネガティブなイメージをポジティブなイメージへと「転換」させる基本概念は、「現実感」「非現実感」「身体

性」に分類できることが明らかになった。

事例研究 3 において、「現実感」「非現実感」の変化要因項目とその印象が不整合だった 26 例と、印象が整合していたが、肯定的 / 否定的の回答数がほぼ等しい 4 例の合計 30 例が、特に両義性を強調している例であると解釈し、事例研究 4 の対象とした。心理的計測を行い、回答者の印象評価を統計的に把握することから「両義的感性イメージ」の特性を明らかにし、構造として捉えた。そこから見出された特性は以下である。

(1) 感情：動揺（否定的印象）・驚く（肯定的印象）

(2) 経験：新しい発想（肯定的印象）・未知感（肯定的印象）

(3) 心理：触れたくない（否定的印象）・強い印象 / 残る（肯定的印象）

また、そこから、ネガティブなイメージをポジティブなイメージに転換する契機は、「クリエイティブ」という認識であることを明らかにした。肯定的印象を与えやすい「新しい発想」「強い印象 / 残る」「未知感」が、「クリエイティブ」という認識を促進する要因となっていることがわかった。

本研究の結果が、デザインの表現として活用可能かについて、「髪」を表現要素に用いた作品を制作し、その有効性について検証した。各作品を鑑賞してもらった結果、鑑賞者の感想から「両義的感性イメージ」の諸特性の有効性と、デザインへの活用が可能であることを示すことができた。

「両義的感性イメージの構造」の「心理」の結果において、否定と肯定の間の錯綜がみられた。この錯綜の中に否定と肯定の境界、または臨界点のようなポイント、すなわち、「転換点」があることがわかってきた。ここには何らかの規則性があると考えられる。さらには、否定と肯定が平衡を保っている状態の範囲もあると考える。このような否定と肯定の「転換点」と否定と肯定の平衡を保っている範囲に着目し、「転換」のメカニズムを明らかにすること、また、その中から、本論で明らかにした「転換」の契機である「クリエイティブ」という認識についてのさらなる理解と、デザインへ応用するための検証を行うことが今後の課題である。